

歴史観と日本人の思考様式

田 浦 武 雄

I 歴史観の問題点

近年、私は世界の中の日本文化について、思考様式を焦点において、その客観的記述と改革の処方について研究してきた。前回は国際化の問題に関連して、日本人の思考様式を検討した。今回は価値の多元化に関連し、歴史観・歴史認識と日本人の思考様式の現実と課題について検討することにする。

敗戦を契機として、わが国は全体主義から民主主義への転換が要請された。これは、人々に精神革命を要求するものであった。戦前と戦後のたてまへのちがいが強調されたが、本音のところ、価値の転換が行われたであろうか。自民族中心主義・自国中心主義・国粹主義の考え方に偏らず、文化相対主義、国際理解の考え方が生まれてきたであろうか。近年、教科書問題でアジア諸国特に中国や韓国から、日本の一部の歴史教科書にみられる歴史の歪曲や大東亜戦争の美化が行われているとか、日本の指導者は戦争責任や戦争犯罪についての反省が乏しいのではないかという批判がでてきた。これに対し国内では、よけいな内政干渉としてつきはなす動きもみられる。このような現象をみると、日本の自民族中心主義、皇国史観等の歴史観は克服されていないのではないかという問題点がうかびあがってくる。

戦争をめぐる歴史認識を正しくし、民主的な歴史観を確立することは、欧米に対する劣等感とアジアに対する優越感を、ながい間形成されてきた日本人にとっては、容易ではない課題であるように思われる。

歴史認識の点で、戦前の皇国史観や自国中心主義をなかなか脱却できない日本人の思考様式を、よりよく改善し、民主的な歴史認識を確立する課題は、現在の日本人に投げかけられた課題ではないであろうか。

また中国や韓国といった、第二次大戦中、日本軍によって痛めつけられた国々から、日本の一部

の歴史教科書への批判が、強烈に行われているのに比べて、ドイツの歴史教科書に対しては、かつてナチスによって痛めつけられた隣国からの非難が、戦後には出てこなかったのは何故であろうか。

これらの問題を含め、歴史認識の問題について多くの示唆を与えたのは、元ドイツ大統領リヒャルト・フォン・ワイツェッカー (Richard von Weizsäcker 1920-) である。同氏は、1981年5月西ベルリン市長に就任した後、1983年7月西ドイツ大統領となり、1990年統一ドイツの大統領となり、1994年7月まで、大統領として働いてきた。

1985年5月8日、ドイツ敗戦40周年の日に行った同大統領の演説は多くの人々に感動を与え、明日への勇気を与えたといわれている。この演説はその後、「あの演説」として、ひきつづき今日も注目されている。次章で「あの演説」の概要を延べ、学ぶべき点についてふれたい。

II 歴史を心に刻む

1985年5月8日、ドイツ敗戦40周年の日にあたって、西ドイツ大統領ワイツェッカーは、歴史的な演説を行っている。この演説は国会議事堂に集まった約700名の人々の前で行われた。すべての人々が息をのんで聞いたと言われている。この演説が終わったあと、大統領に賛意を表してよせられた手紙は6万通をこえ、1年間で演説のコピーの発行は150万部となったと言われている。日本でも同年11月号の雑誌「世界」に掲載され、後に岩波ブックレットで『荒れ野の40年』¹⁾と題して出版され、版を重ねている。この表題は日本語訳のタイトルで用いられたものであるが、この演説の大切な要素を明確に指摘しているといつてよい。

『荒れ野の40年』は、もとは旧約聖書の出エジプト記が伝える、エジプトを脱出したイスラエルの民が、モーセに導かれて旅をした試練と苦闘の

40年のことである。敗戦後40年のドイツ人の歴史を、かつてモーセに導かれた40年の旅の歴史と重ね合わせて考察されている。ワイツゼッカーの演説の鍵ことばは、歴史を心に刻む (Erinnerung) と和解 (Versöhnung) と言ってよいと考えるが、Erinnerung は想起とも訳すことができる。

同大統領演説の中心主張と思われる部分を取りあげてみよう。

罪の有無、老幼のいずれを問わず、われわれ全員がこの過去を引き受けなければなりません。全員が過去からの帰結に関わりあっており、過去に対する責任を負わされているのであります。

老人も若者も互いに助け合って、この過去を心に刻みつけることが、自分たちの生命に関わるほど大切なのはなぜであるかをよく理解しうるようにしなければならぬし、それは可能なのであります。

この過去を精算することが大切なではありません。それはわれわれには不可能であります。過去をあとから変えたり、なかったことにすることはできません。しかし過去に対して目を閉じる者は、現在にも盲目となります。非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、新しく起きる非人間的なものに負ける危険に陥りやすいものであります。²⁾

ここで私たちが注意したいのは、同氏が国家元首という立場にあり、しかも西ドイツでは政治的実権のない大統領の地位にありながら、自国が犯した罪責を、具体的にあげて反省したその率直さと誠実さである。

わが国の「教科書問題」や「靖国問題」等において明らかなように、国や民族の罪責は、国の威信や面子のために、なるべく隠しておくか曖昧にしておく傾向が強いのがふつうと考えられている。また次代を担う若者たちに、誇り高い「愛国心」を育成するためには、できるだけ、都合の悪いことは隠しておいたほうが良いと考える政治家は存在している。これに比べて、ワイツゼッカーの率直さと誠実さはどこからくるのであろうか。端的に言えば、キリスト教信仰に基づき、自らの罪を率直に認め、それを大胆に告白して神の赦しを請うところにあり、戦争で痛めつけた他の

民族や人々との和解 (Versöhnung) を心から願っていることから生じている。

「歴史を心に刻む」とは、ただ過去の悲劇や怨根の思いに固執することではない。かつて旧約の時代エジプトを脱出した民は、自分たちを解放した神のわざを想起することによって生きぬいた。それと時代は異なるが、ユダヤ人に対してナチスが行った非人間的な行為を想起し、心に刻むことによって、過去が生みだした現実を変革する力とし、ユダヤ人との間の亀裂を克服する和解が可能になったのである。想起することなくして、和解は起こり得ないことを自覚することが必要であり、過去に目を閉じる者は現在にも盲目となり、現在、どうするべきかの行動の選択を誤ることになる。このようなワイツゼッカーの歴史認識と和解の心とは、大きく異なったものを、これまでの日本の政治的指導者を含め、かなりの日本人の思考様式の中にみることができないのではない。

ワイツゼッカーは、この5月8日を敗戦の日であるとともにナチスからの解放の日と言っている。これに比べ日本人にとって、8月15日は終戦記念日といわれているが、軍国主義や国家主義や国粹主義からの解放の日と捉えてきたかどうか、その後の推移をみると疑問符をつける人もかなり多いと思われる。

III 歴史と価値観

III-1 過去の反省

戦後50年の歴史の節目に、ワイツゼッカーは、来日して、東京や名古屋で講演やシンポジウムを行っている。1995年8月7日、東京の虎ノ門ホールでの講演「ドイツと日本の戦後50年」³⁾では過去に学ぶことの重要性を教えている。その要点をまずみてみよう。

日本は島国国家であるのに対し、ドイツは大陸の中央に位置し、9つの国と国境を接している。島国の人々は、独自色が強く均一の伝統、歴史、文化をもつことがしばしばである。日本は、アジア諸国と比べると自分たちは特別な範疇に属すると感じている。日本人の国民感情はきわめて独特な性格をもっている。これが近く隣の隣人たちによって相対化されたことはなく、むしろ200年にわたる広範な鎖国を通じてさらに

先鋭化されてきた。今から150年前に外国の影響を受け入れることになった際も、日本の伝統的な国民感情は必要なものと受け取られ強化されてきた。

日本の独自性の感情は、今世紀のあらゆる動乱にもかかわらず、基本のところは変化していない。近年日本は、アジアの国々に対して、経済の面で目をむけ、アジア太平洋経済協力会議(APEC)にも参加し、重要な役割を担うようになったが、状況は変わっていない。

ドイツは無条件降伏後、ナチスからの解放を経験し、国家を越えた統合へ、特に欧州連合の一員として、国家理性を国家レベルではなく、統合されたヨーロッパが国家理性となっている。

このようにワイツゼッカーは、日本のもつ一種の島国根性を指摘し、国家の独自性や伝統を強調するあまり、国際理解の精神が稀薄であることを述べている。日本は経済的な利害には敏感に反応しているが、国家本位の考え方と結びつけすぎると、エコノミックアニマルとして、アジア諸国が批判したような傾向に陥る危険性があることを日本人の一人一人が知る必要がある。

III-2 価値観の連続か非連続か

ワイツゼッカーは、隣国からの不信を解消していくことは、現在および将来にわたる死活の関心事であるという。自らの歴史と取り組もうとしない人は、自分の現在の立場を理解できない。過去を想起することを否定する人は、過去を繰り返す危険を冒しているとも警告している。

ドイツが隣国の不信を解消するのに役だったものとして、同氏は次のことをあげている。私なりに整理して要点を記すことにする。

(1) キリスト教会の告白 教会がナチズムの支配に対して抵抗する勇気が弱かったことを告白し、戦後改革の行動をおこしていったこと。

(2) アデナウアー首相の政策 1950年代に、当時のアデナウアー首相が、ナチスの犠牲者の遺族、とりわけイスラエル国家に対する多額の補償政策を打ち出したこと。

(3) ワイツゼッカーの演説 1985年5月8日、第二次大戦終戦記念日に、ワイツゼッカー大統領

は演説を行い、率直に過去と取り組み、戦争責任を告白し、改革の道を示したこと。

(4) 欧州共同体への加盟と隣国との和解 ナチスが最初に攻撃したポーランドと、戦後いち早く和解し、共同の教科書委員会をつくって、若い世代が自分たちの歴史について共通の統一された見解を持つように努力した。この種の努力は他の隣国とも行われ、欧州共同体への加盟を行ったこと。

このようにドイツの指導者は隣国の不信解消に努力したことを、私たち日本人は学ぶべきであるが、さらに注目すべき特色は、ナチスとの断絶を明確に実行したことである。この点についての同氏の中心主張をみてみよう。

ナチスは、反ユダヤ主義・独裁主義に徹し、ホロコーストで知られるように、多くのユダヤ人等を殺害した。ナチスの活動は、ドイツの歴史では例外的な局面であり、今日ナチズムに同調する人はいない。

日本の場合は、ドイツとちがって、歴史的な連続性がみられる。宗教的な基盤、天皇制、国家体制は、戦後もほとんど維持され続けた。他に例をみない戦後日本の経済的・産業的成功が行われたが、伝統の継続性は強力に維持されてきた。

ドイツはまずチェコとの和解を重要だと考えた。ヒトラーはチェコを占領中チェコ人を抑圧したが、戦後逆にチェコは2年にわたって、ドイツ系少数民族約300万人を国外へ追放した。しかし、共産主義の支配がチェコで終わった時、ハベルチェコ大統領はこれらの追放の不正を告白し、ドイツ人との和解をよびかけ、大変な勇気と誠実さを示した。

ドイツとフランスは、第二次大戦を含め、百年以上に及ぶ敵意と戦争の歴史を経験したが、戦後和解に成功した。1995年5月8日の終戦記念日の記念行事に出席した当時のミッテランフランス大統領は、ヒトラーの命令に従ったとはいえ、ドイツの兵隊も、フランスの兵隊と同じく、郷土愛に動かされて自らの生命を賭けたものもいた点に留意し、ドイツとフランスの市民レベルの意思疎通を表現してくれたことを、ワイツゼッカーは評価している。

戦後、両国の和解が成立できたのは、両国が誠実に過去と取り組んできたからである。もしもドイツ人が過去を川のように流してしまえという原則に従っていたならば、何も解決できず、外交面での孤立化を長引かせ、内政面では硬直状態を助長していたであろう。

ワイツゼッカーはこの講演では直接ふれていないが、1962年、当時のアデナウアー西ドイツ首相が、フランスを訪問し、ド・ゴール大統領と共に、ランス司教座教会のミサに出席した。このことは何世紀にも及んだ独仏の対決に象徴的終止符を打ったものといわれた。これに類した和解の情景が、隣国と日本の場合にはみられなかったことを反省する必要がある。

ワイツゼッカーは、世界の人々が直面する今後の難しい問題について次のように述べている。その中心主張をまとめてみよう。

今や世界の多くの人々の安全にとって、新たな危険が生まれている。爆発的に増加する世界人口、人権の侵害そして少数派の権利の侵害、多くの民族の飢餓と困窮、世界中での人口移動、それに伴う難民の悲惨、天然資源の浪費および環境の破壊などが、新たな危険の例である。

これらの危険の克服に、ドイツも日本もどれだけの貢献をなすうるかの課題が与えられている。

誠実かつ率直に過去と向かい合うことは、遠近の隣人との、信頼にみち、国民としての利害に最も役立つ協力関係にプラスの作業をもたらすものであり、このことをわれわれは経験で知っている。

このようにワイツゼッカーは、外国からの不信の解消こそ、死活の関心事であることを力説している。かれの言葉は深い思索と重い経験とに裏うちされており、日本人の反省を促すものと言える。アジアの隣国との和解を妨げているものとして、日本の国粹主義と、アジア諸国民を一段下にみる日本人の思考様式や国民感情が改革されないかぎり、アジア諸国との共生は困難である。このことをワイツゼッカーの講演を読んで感じた。

IV 歴史に学ぶ—新たな50年に向けて

IV—1 寛容の精神と他民族との共生

①政治と倫理

ワイツゼッカーは、1995年8月14日に名古屋で開催された「歴史に学ぶ—新たな50年に向けて」⁴⁾のシンポジウムで、冒頭スピーチを行い、シンポジストとしても参加している。私も聴く機会をえたが、スピーチの中心主張をまとめ、学ぶべき知恵を深めたい。

私たちはなぜ歴史と取り組むのか。ドイツの歴史家レオポルド・ランケ (Leopold von Ranke 1795-1886) は、「歴史は明日の知恵を授けてはくれない。しかし永遠の賢者にしてくれる」と言っている。この場合賢者とは、さまざまな民族が利害を異にしていることを理解し、政治の課題がこうした利害を調整するところにあることを知っている人である。さらに人間は個人の生活でも社会の生活でも、倫理・道徳的な基盤を必要とする。この倫理は、ともに生きている人間の権利と尊厳を尊重することである。歴史と政治における賢明さとは、利害関係と道徳を分けることではなく、両方を一致させることを要求している。道徳だけ尊重し、利害を見ない人は空論家になってしまう。しかし道徳なしに利害を代表すると他民族と対立することになる。第二次世界大戦では、日独両国は十分にモラルを考えることのないままに自国の利害を代表し、それぞれの国の長期的な利害を正しく理解していなかった。それによって隣国がそろってわれわれに反対することになった。よい政治をしようとするならば、こうした過去の過ちを認識することが非常に大切になってくる。

このように、ワイツゼッカーは、利害関係と道徳とを分けることなく、両者を一致させることが大切であること、良い政治をするためには過去の過ちを認識することが大切であることを強調している。ドイツ国民は、過去の過ちを認識し、ナチスに関わった人を今なお徹底的に排除し、ポーランドやフランスを始め隣国との和解に努めてきたことを戦後の歴史は示している。それに比べると日本国民の中には、過去の過ちに対する認識は薄く、国家主義者の追放も不徹底で、むしろ全

体主義戦争の指導者の一人を戦後の首相に祭りあげたり、歴代の内閣の閣僚で、過去の過ちの意識が乏しく、隣国との和解を無視した発言をする者が枚挙にいとまがないことは、ドイツとはちがっている。また近年の「靖国問題」や「日本史教科書問題」では、過去の過ちの認識が依然として薄く、隣国との和解を軽視する動きがみられるのは、ドイツに比べ、歴史の教訓を生かしていないという批判の声が、内外からかなりあがっているのが歴史の現実である。

②若者の責任

戦後に生まれた若者が、過去に責任を持っていないことは明白であるが、戦前の歴史についての理解が必要であることにふれて、ワイツゼッカーが述べている主張を次に要約してみよう。

若い人たちが過去に責任を持っていないことは明白である。しかし隣国の人たちは第二次大戦からくる不信感を持っている。若い人たちは、その不信感がなぜ生まれたかを理解することが重要である。若い人たちが、隣国の若い人たちにどのような歴史像が与えられているかを学ぶのは、非常に意義深いことである。

ドイツは、欧州連合の中で統合された歴史の教科書を作った。また、ユダヤ人が戦時中どんな目にあったか、自分の地域で何が行われたかの歴史の研究で、高校生に大統領賞が毎年与えられている。

このようにワイツゼッカーは、若い人たちに対する歴史教育の重要性を強調している。日本人が自らの歴史についてどう考えたらよいか、他国の人たちに日本の歴史像がどのように与えられているかを知ることの大切さを指摘している。残念ながら、日本と中国や韓国との統合された教科書はない。戦争責任を明確にもち、他の国との共生の意欲の乏しいと言われている日本の政治的風土からすると、統合された教科書をつくり、偏見のない歴史の教材をつくることは、難しいように思われる。

③未来の課題

日独両国の過去の歴史と現在には、さまざまな類似点と相違点がある。両国民の間で未来に対する感覚に違いがあるかどうかについて、ワイツゼッカーは関心をよせている。さらに未来に向け

て、共通のテーマがあるとしている。同氏の中心主張をみてみよう。

天然資源や環境の問題が共通にあり、水、大気、土をいかに汚染から守るかもその例である。未来に負担を負わせながら現在を楽しんではいられない。互いに連帯し、未来について連帯して考えなければならない。環境問題はまさにその典型である。

非軍事国家(Zivilmächte)として、他の民族と寛容の精神の中で生き、さまざまな文化と出会い、その出会いが暴力の衝突にならないようにすることが、未来へ向けての最も大切な任務である。

このように、同氏は、寛容の精神の中で、他民族と共に生きる姿勢が必要であることを主張している。新たな50年に向けて、歴史に学ぶことは何かを示している。

当日のシンポジウムは、加藤周一、大江健三郎、坂本義和とワイツゼッカーとの4氏によって行われた。次に討論の要点を述べ、コメントをつけ加えたい。

IV-2 民主主義と他民族との共生

①不信感への対応

加藤周一は、国家利益と倫理的価値とを切り離して、国家利益だけを追及すると、他の国々に不信感を与えることについて述べている。その要点をみてみよう。

世論調査では韓国で60%、中国で70%以上の人たちが、日本に不信感を持っているとされている。日本の将来のためには、この歴史と結びついた不信感をなくすようにしなければならない。日本では、大都市の無差別爆撃、原爆投下など第二次大戦の犠牲者としての日本を強調しがちで、加害者としての日本は、中国・韓国の市民に多くの犠牲をもたらし、731部隊の人体実験、従軍慰安婦の問題もある。若い人たちに対して、「日本だけでなく他の国もやった」などと責任をごまかすのではなく、加害者としての日本の歴史をはっきりさせる必要がある。それをやらなければ日本は、アジアや世界で孤立すると思う。

このように、加藤はアジアや世界で、日本が孤

立化することを防ぐには、加害者としての意識を明確に若者に教えていくことが必要であることを強調している。日本人の思考様式としては、日本の被害者意識を拡大して強調し、加害者意識を軽視する傾向があることを警告したものである。

②若者に信条を

大江健三郎は、ワイツゼッカーの話の中にある『賢者になる』ということに関連して、特に若者が現実の背後に確かな信条がなければならないと述べ、ワイツゼッカーの話は、尊敬に値するとし、次のように述べている。

生きていくのによい社会の条件として、イギリスの小説家でジョージ・オーウェルは二つの条件をあげている。それは「正義が満たされている」、「ディセント (decent) な人間がいる社会」である。ディセントとは、むさぼり過ぎない、寛容なという意味が含まれている。若者にしっかりした信条を伝えていくことが必要である。

このように、大江は、ワイツゼッカーの話が若者たちがもつべき信条のありかたを示している点を評価し、ワイツゼッカーのような政治家を尊敬すると述べているが、逆に言えば若者に望ましい信条を与えきれない日本の政治家への批判が含意されている。また日本人の思考様式として「賢者になる」とか「ディセントな人間になる」ことを志向するよりも、めさきの利害で動く傾向があり、哲学とか信条とかを口にすることを敬遠したり、軽視する傾向があることへの批判でもある。

③戦争責任は今の問題

戦前と戦後とでは、ドイツは非連続であるのに対し、日本は連続性があることをワイツゼッカーは述べたが、坂本は、冷戦の中で日本には非連続があったとして、次のように主張している。その要点を述べてみよう。

冷戦の中で、市民が日本の民主主義を守ろうとして、日本を新しくしようとして行った運動の時に非連続性はあった。

戦争責任の第一は当時の指導者の国民に対する責任、もう一つは他の民族に対して罪を犯した責任である。国民は当時の指導者の責任を問い続けなければ、本物の民主主義に至らない。戦争責任は過去の問題ではない。日本の民

主主義を深めていく大きな表れの一つが、戦争責任を問うということになる。

このように坂本は、戦争責任は今日の問題でもあることを指摘した。

ドイツではナチスの戦争犯罪が今なお追及されているのに比べれば、他の箇所でもふれたが、日本では戦争責任者の一人を戦後の首相にしたのを始め、歴代の内閣の閣僚で戦争責任をほかした言い方をする者が次々とでてくるのは、日本人の思考様式のもつ傾向や特色を示しているとも言える。

④民主主義と教育

ワイツゼッカーは、三者の意見を聞いて、意見を補足している。その中心主張をみてみよう。

民主主義は、その国の小さな層が支配するのに代わって、別の小さな層が支配することではない。国の大きな部分で決定するようになることである。歴史の中で民主主義国家同士で戦争をしたことがない、という事実が大事だと思う。

他の文化や宗教への寛容の精神を持つことは簡単ではない。例えば、イスラム教とキリスト教はかなり違う。

積極的な民主主義との関係において、責任をはっきり意識させる教育を行うことによって、将来の課題に積極的に立ち向かっていく必要がある。

このように、ワイツゼッカーは、民主主義との関係において、責任をはっきり意識させる教育を行うことによって、将来の課題に対処することの必要性を強調している。

加藤は、民主主義における平等の考え方についての日独のちがいを次のように指摘しているが、民主主義を考える場合に重要な一つのポイントである。

日本の平等は皆で同じことを意味しており、皆で渡れば怖くないという考え方である。これに対し、ドイツでは各個人が別のことを言う権利を平等に持っていること、例えば、別々の服を自由に着る権利を意味しており、ドイツの方が、少数意見の尊重がおこりやすい。

このように平等についての考え方の日独のちがいを同氏が指摘していることは、ワイツゼッ

カーも面白い指摘だと言っており、少数意見をいかに考えるかは、民主主義の質を示すものである。国会で少数意見であっても、多くのメディアや知識人にサポートされている場合、多数派が重い負担として謙虚に考えることが大切であることを、ワイツゼッカーが指摘していることは適切である。しかし民主主義の寛容さのおかげで、国粹主義的なメディアも活動していることに注意し、警戒する必要がある。

⑤民族主義

坂本は民族主義が、人々のコンセンサスをつくるうえで、一番強力なイデオロギーであると述べ、次のように民族主義の問題点をとりあげている。

民族主義はいったん火がついて社会を支配し始めると、民族主義に対して、否と発言することが難しくなる。戦時中に日本やドイツが経験した。

近年、民族紛争が言われているが、民族が違うから紛争がおきるわけではなく、紛争へと導く政治的・経済的条件等が問題の根にある。特定の少数の政治集団が、権力維持の手段として民族感情をあおり、他との共生を排除することによって、民族紛争はこじれてくる。少数の指導者が自己の利益や体制を守るために体制を維持しようとして、民族主義をあおっていることに留意すべきである。

このように、坂本は民族主義のもつ問題点を指摘しているが、民主主義を基盤としておれば、民族的感情が、他民族を排除し抑圧し、殺害するといった危険な民族主義となることはないこと、民主主義に基づく寛容さがいかに重要であるかを指摘している。日本人の思考様式には、ことさら単一民族であることを誇示するのを容認する傾向が残っていることを警戒すべきであることを適切に述べている。

⑥核の問題と広島の人

大江は核廃絶の問題と広島の人たちの声について、討論を行っている。その中心主張は次の点にある。

日本では、冷戦の40年以上を支えていたのは、核の威力への信仰であった。核兵器があれば平和が保てる、自分たちの国が優位を保て

る、という信仰が戦後を貫いてきた。ところが広島には第三の受け止め方がある。人間は原爆をのりこえることができるという広島の人々の生きる意欲がある。被爆者は、唯一の有力な少数派である。核廃絶を実現しようという力を持つ人たちとして、強く意識しなければならない。

しかし日本政府は、広島の人たちの声を聞いてこなかった。衆議院の戦後50年国会決議の中では、戦争責任は曖昧にされ、核廃絶を世界に訴えようという項目もなくなった。

ドイツは50年間歴史に学んだが、日本は過去について言うのはやめるムードにある。日本人はドイツがこれまでの50年に学んだことを、今後の50年に学び行動に表すしかない。

そのためには憲法をよく考えることが一番の指針になる。日本での多数派は、天皇を、文化、社会、政治的に大きいものとして受けとめさせようとする考え方をもっている人たちで、かれらが政府を担当し、選挙にも勝っている。

私たちがやらなければならないのは、憲法の天皇条項、不戦条項などは、示されているままに実現していくことが大切である。そのために市民が積極的に言葉や行動に表すしかない。それがこれから50年間、私たちの進む道ではないかと、ワイツゼッカーさんの話を聞いて考えた。

このように大江は述べているが、核廃絶に向けて、広島の人々の心を心として、歴史に学びながら、憲法の精神を生かすことの大切さを訴えている点に注目したい。シンポジウムのコーディネーターをした岡本道雄は、しめくくりの言葉として一人一人が歴史に学び、そこから市民として文化的な力になるというのが目標であることを強調している。

⑦歴史の真実を学ぶために

シンポジウムでは、四氏の話しあいを終えたあと、会衆からの質問に答える時間が設けられたが、日本人の思考様式の問題からみて、注意すべきことは歴史の真実を学ぶにはどうしたらよいかの問題であった。

大江は、日本の歴史教科書を作り直すことが必要であり、侵略戦争の歴史を教えることを妨げているのは、教科書の検閲であることを指摘した。

坂本は、大学の試験問題を変え、近・現代史を学習しなければ答えられない問題を増やせばよいが、これは日本の構造的な問題であって、それだけが万能薬ではないことを指摘した。

ワイツゼッカーは、教育全般については、知識の習得と並行し、子供の創造力を伸ばしてやるのが大切であるとし、現代史もドイツでは十分な形で授業を行ってきた。ポーランドとドイツ、チェコとドイツで教科書委員会を組織し、二つの国の授業で使える歴史の教科書を作ってきた。教育で大切なのは人生の競争を幼いうちに始めないことである。

このように、ワイツゼッカーは述べているが、日本ではどうして現代史のまともな教育が行われず、他の国特に中国、韓国との共同の教科書が作られようとししないのか、歴史観や歴史認識の問題を含め、日本人の思考様式のありかたと改善の処方方を問う必要がある。

大江は、教科書の検閲がネックになっていることを指摘した。現在の教科書検定制度は、戦前の国定教科書とちがって、国が定めた学習指導要領に準拠して、教科書が作成され検定が行われている。学習指導要領の作成は、政治的に中立的な機関が行っているのではなく、政権政党の文部大臣の下で行われており、政党の政策に左右される危険性がある。また、直接教科書の検定に当たる教科書調査官は、他の公務員のように競争試験で採用されているわけではない。特に日本史の教科書調査官は、代々、皇国史観的な考え方をもった者が特定の大学から送りこまれてきたと言われている。検定するものさしに歪みがある場合、当然日本の教科書の内容が左右されてくる。このことは、過去における家永三郎の教科書訴訟問題でも問題とされたことがある。2001年に問題となった「新しい歴史教科書を作る会」の日本史教科書の場合も、どのような人が検定に当たったかが問題であり、検定のやり方が改善されなければ、内外から批判されないような教科書検定は出来にくいのではないか。教科書検定制度の改善とともに教科書調査官の選び方の改革が必要となろう。

しかし歴史観や歴史認識と日本人の思考様式の関連の問題はさらに根が深いところから考えてみる必要がある。

V 歴史観・歴史認識の相克

民主的歴史教育が行われ、民主的な歴史認識が国民のものとなるには、多くの難問があるように思われる。

皇国史観や自民族中心史観や国粹主義的歴史観は、現在の保守的な政治家の中にも根強く残っており、日本人の思考様式にもかなり支配的であるようにもみられる。日本人の思考様式といっても、戦前とちがって、反皇国史観や民主主義歴史観が相当な力を持ってきており、歴史観や歴史認識に関しては、日本人の思考様式は両極化の傾向がみられるが、ドイツと比べてなお根強いのはやはり自民族中心史観や国粹主義的歴史観であるように見える。

ワイツゼッカーが日本を訪れた1995年8月、時の内閣は村山内閣で、社会党と自由民主党の連立内閣であったが、その時の文部大臣が、問題となる歴史認識を示して次のように述べている。その発言の要旨をあげてみよう。

国民の七割が戦争を知らない時代になってきているのに、あいも変わらず昔を蒸し返して、いちいち謝罪していくというやり方は、果たしていかなものか。

侵略のやりあいが戦争であり、優勝劣敗で勝った方が相手を侵略することになるんじゃないか。日本だけではなく、世界中にはいろいろな事例がたくさんある。これをいつまでもほじくってやるのが、果たして賢明なやり方なのか。⁵⁾

このように問題発言をして、アジア諸国の批判を浴びて撤回するという失態を演じた。国の教育行政を司る文部大臣の発言であっただけにとりわけ深刻であると思われる。日本では戦争をめぐる閣僚の問題発言が年行事のように繰り返されてきたが、「これはもう失言ではなく、保守政党の本音と見なすべきだろう」⁶⁾と言う人もある。歴史を心に刻めというワイツゼッカーの主張とは全く対照的である。

この閣僚の問題発言のような歴史観と歴史認識は、いままも日本社会の中に、日本人の思考様式の中に、根強く生き続けており、近隣のアジア諸国が警戒しているのもまさにこの点にあるとあってよいし、このままの状況が続いていくな

ば、日本はアジアから完全に孤立する途を辿ることになる。

ワイツゼッカーは、日本の過去についての国際的評価にふれ、「日本軍が進出したアジアのすべての国の民衆が、戦争と占領の時代の日本の役割について、かなりの程度まで一致した見方をしていることは疑いない」と、注意深く言葉を選んで控えめな指摘をしているが、日本の過去の役割が侵略であったことを反省すべきであることを忠告したものである。そして次のような助言をしている。

「(過去の歴史を)心に刻んで記憶することができるというのは、困難なことだけでなく、偉大な力でもある。明暗双方をもつ過去の全遺産を受け入れ、ともに責任をもってこれを担うことこそ、一つの国民を真の国民にするのである。」この言葉には温かい同氏の心がこめられている。これまでのところ、戦時中の日本の歴史を記述する場合、考え方のちがいを強調し、不都合な史実や被害者側の資料から目をそむけ、自己中心的な史実解釈が行われてきたことを反省し、歴史を直視するワイツゼッカーの歴史観や歴史認識を、日本国民も学び、他の国々特にアジアの隣国の信頼醸成の道を選ぶことが重要である。これらを含めてワイツゼッカー講演から学ぶことは大きいと思われる。

VI 歴史・政治・信仰

VI-1 政治の尺度

国民の歴史観やそれと関連する思考様式には、国家権力の働きかけが影響する場合が多い。二大政党が並立し、政治の成功か失敗かによって、投票行動でプラグマティックに政権を交代させるような社会の場合は問題にならないかもしれないが、独裁的な政権がながく続く場合、国民の歴史観もパターン化され、思考様式も画一的になる傾向がある。戦前の日本とドイツはその好例である。戦後は、価値の多元化の傾向が日本でもいくらか認められるが、国家というものをどうイメージするか、政治権力が戦後の歴史をいかに方向づけてきたかは、歴史観とも関わる重要な課題である。

ワイツゼッカーは、西ドイツ大統領の時の1980年に、「愛—それは政治の尺度であり得るか」⁷⁾で、

国家のあり方を論じているが、歴史観と国家観を考える場合、参考になる論議が展開されている。その中心主張をみてみよう。

国家の古典的な課題としては、国の内外の安全の確保、法の尊重とそのための権限、共同生活を営むための力の独占的な行使等があげられるが、今日の国家を特徴づける二つのしるしがある。

①政治における自由 国は国民の福祉を確保する役割を増大させてきた。国民が得ることと与えることとの関連、与えられることと、自分が課題を担うこととの関連を見抜くまなざしを曇らせてしまう傾向がある。また国民は、自由を国家に対して、一連の要求をつきつけることであると理解させてしまうような教育をしてしまう傾向がある。したがって人々の自由な諸力をどのような領域や方向に向けていくかが重要な問題となる。

②寛容な多元主義 寛容な多元主義こそ国家の智慧である。ドイツ憲法は、「神の前と人間の前における自分の責任を自覚し、ドイツ国民は…」で始まっている。国家は世界観に関して言えば中立であり、真理追求は国家の事柄ではない。寛容な多元主義こそ国家の最高の智慧である。愛についての判断は国家は無理であり、スイスの神学者カール・バルト (Karl Barth 1886-1968)が言うように、国家は精神的に靈的に物事を判別できない。政治の秩序は、人生と世界の意味を問う究極の問いに答えることを使命とすべきではない。

しかししっかりと見定めておかなければならないいくつかの問題がある。国家は国民の福祉のために配慮するとともに、管理を強めている。また社会における目標は、物質的なものに留まり、理念的なものではなくなっている。互いに寛容であることを奨励することはよいとしても、人々の間に内容的な価値を問わない恣意的な態度を生み出すことになるおそれがある。

愛はわれわれの政治の秩序の尺度である。キリストの愛の中でわれわれに出会う宗教に帰り行くこと、それこそがわれわれから不安を取り去るのである。それこそがわれわれを自由に

する。それこそがわれわれをして理性と体験とを責任をもって生かす確かな心と能力とを与える。われわれが過ち多い人間として、愛の尺度にふさわしく生きること、何度でも、しくじるとしても、愛には他のいかなる力にも勝る力が宿っている。そしてわれわれの良心がわれわれを助けて、日々新しい解決を求めることができるようにしてくれる。その新しい解決について、われわれは、自分たちがいつか神の前にあって、きちんと責任を持つことができるようになるとの望みを持つことが許されているのである。

ワイツゼッカーは、このように愛は政治の尺度たりうるかという問題について、キリストの愛についての理解をふまえ、政治が寛容であり、倫理性をもち、人間性を保障する働きをもつことの重要性を述べている。

利権に執着し、票をいかに獲得するか、目さきのことしか考えない政治屋 (politician) ではなく、国内の利害関係を調整し、広く国際的視野にたって判断できる真の政治家 (statesman) であるためには、ワイツゼッカーの言う愛の精神が必要であることを、かれは教えている。政治の尺度であり、基本的価値としての愛の意味について、さらに深める必要がある。

権力によるコントロールを重視する日本の政治が、ワイツゼッカーのいう愛を尺度とすることは期待しにくいかもしれないが、すくなくとも同氏の言う寛容な多元主義の哲学を尊重する努力をしていくことが大切であるように考えられる。

VI-2 政治における赦し

ワイツゼッカーは、西ドイツ大統領の時、1989年6月5日、アメリカのニューヨークにあるユニオン神学大学に招かれて、「政治における赦し」という題で講演を行っている。この日は、ベルリンの壁が崩壊する11月9日から約5ヵ月前の時期である。この大学はアメリカの代表的な神学大学で、ラインホルド・ニーバー、パウル・ティリッヒなどが教授をした大学としても親しまれている。

「政治における赦し」⁸⁾というテーマは、教会でも政治の世界でも、ほとんど論ぜられることのないテーマである。政治観と宗教観と歴史観が

関連する講演の要旨をまとめ、若干のコメントをつけ加えたい。

キリスト者の信仰は、悔い改めと赦しに基礎をもっている。これらは政治に適用できるかどうかを考えたい。いかなる政治的悔い改めも、罪責の告白とごまかさな歴史の想起がなければあり得ない。政治において、罪責の告白もなく、悔い改めもないところでは、いかなる赦しもあり得ない。しかし政治における赦しとは何かの間は残る。罪責とか無実とかは個人的なものであり、全国民が罪責があるとか無実であるということはない。

それにもかかわらず、歴史の重荷は、個人的なものを超える。戦争の時代に生まれたわけではない若い世代は、戦争犯罪に加担したわけではないが、歴史がもたらした結果に対しては責任がある。したがって若い世代は過去を知らなければならぬ。しかし想起する心備えのない者は、自分が今日どこに立っているかも理解できない。

歴史上の真実を正面から見据えるための方法としての想起は、いかなる時代、いかなる国民の政治においても大切な意味を持ってきた。

教会が注意しなければならないのは、世俗の問題においては、自分こそが他よりも優れた知識があるなどと、うそぶくことはできないこと、眼前の問題を究極の真理をめぐる戦いであるかのように取り違えないこと、逸脱した考え方を主張する人を排除しないようにするということである。

国民全体が告白したり、悔い改めたり、赦したりすることはできない。人間は人間の名において、人生がさらに前進を重ね、傷が癒され得るように行動できる。これは、私たちの義務でなければならない。なぜならば、国民について、ディートリヒ・ボンヘッファー (Dietrich Bonhoeffer 1906-1945) が語ったように、「歴史における神の恵みある支配を通じて、国民にとって呪いとして始められたものまでが、国民に対する祝福として終わることがあるかもしれない」からなのである。

このようにワイツゼッカーは、罪責の自覚は人間個人がどれだけ認識しているかが重要であり、

しかもその自覚や認識は、神に対する自己の悔い改めと神の赦しの恵みに対する信仰が不可欠であることを示している。

ドイツとちがって、日本ではキリスト教の信者はすくなく、神道、仏教が圧倒的である。これらには禅宗等を除き、罪責の告白の観点は弱いとみられる。いずれにしても、すくなくとも過去の歴史のもつ負の遺産の面について偏見なく取りくみ、世界の中で孤立化することなく、真の平和を愛する国民として、一人一人の自覚を高めることが必要である。このことをワイツゼッカーから教えらる。

講演のおわりに出てくるボンヘッファーは、ヒトラーの暗殺計画に加わった件で処刑された牧師であるが、もし生きていたならば、カール・バルト以上の神学者になったかも知れない神学者である。ボンヘッファーのことばは、難解であるが、すくなくとも過ちを恵みにかえうものとして、個々人の信仰の力と和解の精神を重視したものとと言える。日本人が戦前のような自民族中心主義の思考様式をもちつづけるかぎり、他民族との和解は不可能である。戦後、経済的復興は日本ではめざましく、アジア諸国への経済援助も大きいですが、それがおごりにならないように、他国の人々に対しても、よい隣人としての倫理性をたかめることが新しい世紀ではとくに不可欠である。

VII 文明の哲学

ワイツゼッカーの歴史観は、広く深い政治的教養や法律的知識の他に、罪を神の前に告白し、赦しを請うキリスト教信仰に支えられていることがわかる。それとともにかれの歴史観は、文明の哲学とも結びついている。⁹⁾最近のかれの文明論の主張の要点をみてみよう。

文化は、もろもろの異なる民族・宗教に根ざした生活様式・社会様式であり、互いに衝突しあうことがある。こうした相異なる文化間の衝突を避けるべく相互に学び合う過程こそが文明である。

19世紀はナショナリズムが頂点に達した時代で、それが20世紀の二度の悲惨な破滅的な戦争に導いた。二度の戦争はナショナリズムに終止符をもたらすべきものであった。いま、平和

的な手段で、国家間の利害を越えて統一を図ろうとしている欧州の試みが進んでいる。欧州のどの国も歴史と伝統のパラエティに富んでいるが、政治的組織のみならず個人的心情も含めて、統一への準備を整えてきた。これは文化の多様性を越えて、文明の建設の一步を築くものである。21世紀にはこの自由な新秩序を平和的に達成し、世界への貢献を計る必要がある。

日本の場合はどうか。日本を訪ねて感じたことは、日本人は過剰なほど丁寧でいて、抑制的なところがある。日本文化には音楽、絵画、芸術に島国という条件を反映して、独自のものがある。外国文化を積極的に受け入れてきたが、今ではアメリカの軽いエンターテインメント文化にオープンになり過ぎている。ドイツも同じ弱さを抱えているが、日本も伝統をできるだけ守っていくことが大切である。⁹⁾

このように、かれは文明論を展開している。文明は、文化の相互理解の過程であることを主張している点に特色がある。文化同士の衝突はありうるが、文明の衝突はありえないとして、アメリカの政治学者サムエル・ハンチントンの「文明の衝突」でアメリカ文化を特別視している点を批判し、文化と文明の概念的区別を述べている。

ワイツゼッカーは、戦前と戦後の日本の政治の継続性について批判的であったことは、前にふれたが、日本の音楽、絵画、芸術の伝統は評価している。

何をもって継承すべき文化であり、伝統であると考えかが重要である。日本人の勤勉さ、仕事へのいそしみなどの生活様式は継承すべきものである。大都市では希薄になったが、地方の市町村に残る人情のこまやかさなども継承すべきものである。しかし一面「長いものには巻かれろ」、「寄らば大樹の影」、「皆で渡ればこわくない」といった思考様式がある。このような思考様式を利益追求的集団志向と、私は呼んでいるが、この伝統は改善すべき伝統として国際化の時代は要求している。今こそ、歴史の過ちをしっかりと見つめ、隣国との共生の方向へと改革していくところに、日本の未来がかかっていると言ってよい。しかし皇国史観的な歴史観や国粹主義的な歴史観は、日本人の思考様式に根づよく残っており、ワ

イツゼッカーが言うように歴史の過ちを誠実に捉え、過去の過ちを心に刻むこと、世界に通用する共生の歴史観を一人一人が身につけることは容易ではないが、達成すべき課題である。

国粹主義の歴史観は、日本では伝統的な宗教観と結びついている。罪を犯した者も死んでしまえば仏や神となるという信仰は、日本人の宗教観に根づよく残っている。「戦犯」とよばれた者も死をもってあがなったわけであるから、神として祭ってよいという信仰が靖国神社の持つ宗教観である。最近の共同通信社の世論調査¹⁰⁾で、小泉首相の靖国参拝を70%の人が支持しているのも、このような伝統的宗教観に基づいている。「戦犯」の考え方を認めず、神として礼拝する思想は、中国や韓国との考え方とは真向から対立するものであり、両者の文化の衝突をどう調和させるか、21世紀は難しい問題を抱えている。多くの国々の文化の衝突を調停できる新しい文明の哲学や考え方が生まれるかどうかとも問題となる。

注

- 1) Richard von Weizsäcker, 40 Jahrestag der Beendigung des Zweiten Weltkrieges, 1985. ヴァイツゼッカー大統領演説 永井清彦訳『荒れ野の40年』岩波ブックレット No. 55, 1986年。
永井清彦編訳『ヴァイツゼッカー大統領演説集』1995年, 3～28頁。
- 2) この部分の原文は次のようになっている。
Wir alle, ob schuldig oder nicht, ob alt oder jung, müssen die Vergangenheit annehmen. Wir alle sind von ihren Folgen betroffen und für sie in Haftung genommen.
Jüngere und Ältere müssen und können sich gegenseitig helfen, zu verstehen, warum es so lebenswichtig ist, die Erinnerung wachzuhalten.
- 3) 東京新聞戦後50年取材版編『改訂新版心に刻む歴史—ドイツと日本の戦後50年— ヴァイツゼッカー前大統領講演全録』東京新聞出版局, 1995年。
『荒れ野の40年』16頁。
中日新聞社編 永井清彦訳『ヴァイツゼッカー—日本講演録歴史に目を閉ざすな』岩波書店, 1996年, 47～93頁。
- 4) 名古屋シンポジウム「歴史に学ぶ—新たな50年に向けて」。8月14日のシンポジウムに私も出席して、ノートをとった。当日の記録は中日新聞、1995年8月15日号に詳しく載せられている。『ヴァイツゼッカー—日本講演録歴史に目を閉ざすな』123～164頁。
- 5) 佐藤 毅「ヴァイツゼッカー氏シンポを聞いて」中日新聞1995年8月15日号。
- 6) 佐藤 毅 同上。
- 7) ヴァイツゼッカー著 加藤常昭訳『良心は立ち上がる』(1995年日本基督教団出版局) 所収「愛—それは政治の尺度であり得るか」(1980年) 157～189頁。
- 8) ヴァイツゼッカー「政治における赦し」前掲書 107～126頁。
山本 務訳『過去の克服・二つの戦後』日本放送出版協会, 1994年, 74～87頁。
- 9) ヴァイツゼッカー氏会見詳報「文明とは相互理解の過程」中日新聞1999年4月23日号。
- 10) 中日新聞2001年8月21日号。

The Historical Perspective and Japanese Way of Thinking

Takeo TAURA*

In order for Japan to take on a vital role in the 21st century, a democratic perspective of history is of vital importance for Japanese people. The Japanese historical perspective based on the Emperor centrism or ethnocentrism since the Second World War should be changed.

In this article I will discuss the following seven topics:

1. Problems of historical perspective
2. To impress the past history on one's mind
3. History and the perspective of value
4. The Lessons of history – toward the next fifty years
5. Conflicts concerning historical perspective
6. History, politics and faith
7. Philosophy of civilization

Richard von Weizsäcker (former President of Germany) in his lecture *Fifty Years after the War for Japan and Germany* and in *Symposium on Lessons of the Past History – Toward the Next Fifty Years* in 1995 and other lectures in 1980's suggests that impressing the lessons of the history of the Second World War upon Japanese people's minds and the ethics of coexistence of world citizens are especially important in the 21st century.

In order to bring about the true reconciliation between Japan and other Asian nations, Japanese should adopt the way of humankind oriented thinking in stead of ethnocentrism and extreme nationalism.

キーワード：歴史観、民主主義、自国中心主義、文化多元主義、国際理解